奥秩父　和名倉沢　2016/08/13-14

メンバー：落合（CL・記録），齋藤（SL），飯野，平川

　和名倉山は奥秩父の主脈からやや離れた位置にあり、原生林に囲まれて登山の対象としては地味で暗い印象を受けるのが一般的だ。しかし、筆者は以前冬に三峰側から雲取山に登った時にみた和名倉山が強く印象に残っていて、そうこうしているうちに沢登りをはじめて山頂に一直線に突き上げる和名倉沢という名渓があるということを知り記憶に留めておいた。

　そんな話を齋藤さんに振ってみたら、学生時代から取りこぼしていた渓だという。

　時期としては適期が長い渓ではあるが、今年の合宿（という名目の飲み会？）は奥秩父の名渓での沢旅もいいだろうとこのルートを選定した。

　今年の夏（8 月 15 日以前）は、少雨で台風の影響も受けることなく比較的天候に恵まれて、多くの山行をこなせている。今シーズン、飯野は既に 12 本目、落合 11 本、平川 8 本目だ。

　今年のベスト・オブ・サワーは誰の手に！？気がつけば無雪期は沢登りばかりしている連中だ。

　前夜は道の駅大滝温泉で仮眠、酒を呷っていたら越後湯沢で同じく前泊している M 氏パーティーからこっちも楽しく飲んでるよと LINE が入り、負けじと写真を送り返す。日付が変わってしまい結局いつも通り寝不足で登山を開始する。

◆8/13（土）曇り時々晴れ　夜は霧時々小雨

<u>駐車場 6：00　大滝 9：30　幕営地（1,480m）13：20</u>

　山の上は雲に覆われどんより曇り空の朝、秩父湖は水不足で地面が露出している部分が多く貯水率がかなり低い。三峰林道から大洞川へ急降下し和名倉沢へアプローチ。

　アナコンダがワニを丸飲みしてしまったようなパッキングが酷い平川君、突っ込みどころ満載だが沢屋の称号‘RIPEN’で原因が酒なので許してあげる。これが巷で流行り’ペニストリー‘。。

　和名倉沢のハイライトは下部から中流部にある。出だしから滝のホールド上にマムシが蜷局を巻いており肝を冷やしたが、特にナメが連続してからの大滝付近と支流の出合に掛かる数々の滝が美しい。ただ難しい滝が多くそのほとんどが巻きになってしまい、東京近郊の踏まれた沢（下部は釣り師も入るため）であるため赤テープや悪場にはフィックスが張られてしまっている部分が多く、沢登りの探検的要素という意味では渓の深さに反比例してやや面白味に欠けてしまう所が残念でならない。

和名倉沢下部、苔むした森で雰囲気はいいがヌメッた岩が多くラバーソールの靴にはよく滑る。

期待していた岩魚も魚影が少なく竿を降るタイミングがなく、吊るしベーコン・ネギマでヤケ酒（左）
山の懐で森と同化し、焚火の炎をみつめお酒を囲んでの談笑がいちばんの至福の時（右）

幕営地に早く着いてしまったせいもあり、長い夜になる。相変わらず齋藤さんのブラックニッカの飲みっぷりがよくいつものようにボトル一本空けていた、平飯ペアも負けじと夜遅くまで付き合っていたみたいだが、筆者は飲みの仕上げ方が悪く先に寝落ちしてしまい、酒のグレードは皆ワンランク上がったようにみえた。渓の夜ではビール・日本酒・ウイスキーをどんだけ飲めるヤツが勝者だね。。

◆8/14（日）晴れ時々曇り

幕営地 7：15　和名倉山 9：35　（二瀬尾根→）秩父湖吊り橋 14：10　基点駐車場 14：55

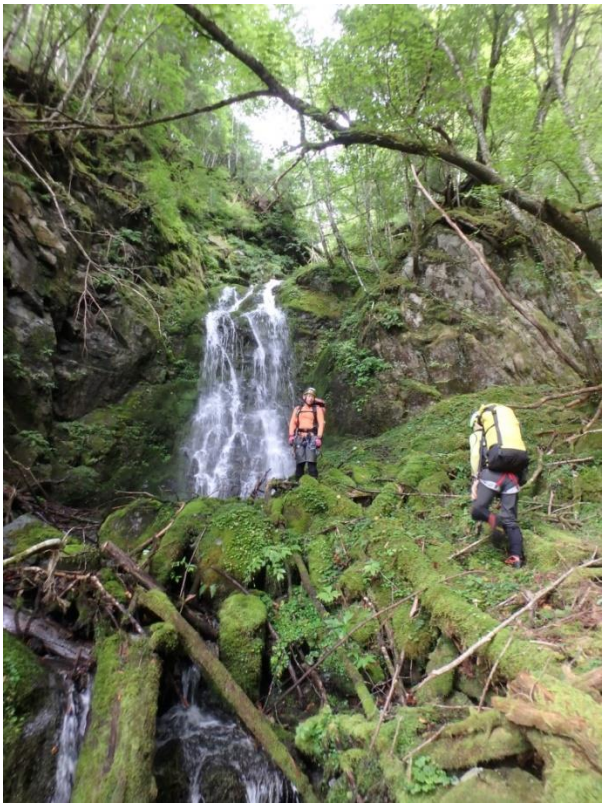
明るくなれば目が覚めるだろうと思い寝落ちしたが、目が覚めたら誰も起きておらず案の定寝坊。

初日楽させてもらっただけに二日目の行程は長い、標高差 600m の登りの後に 1,500m の下降。

上部は湧き水なのか水が非常に冷たく火照った体を何度も冷やしながら登れるのでクールダウン、標高差の割には意外と順調に尾根上に出れたが、地形図を読みまわりを見渡してみると自分たちはちっぽけな存在でとても深い場所にいるんだなといつもながらに実感する。

山頂直下ではスズメバチにブンブン追い回され、最後は部活の階段ダッシュをするかのように遡行を終了。マムシとスズメバチ、、危うく今回はマグナムとポイズンのお世話になるところだった。

深山幽谷な雰囲気の和名倉沢だが、源頭部はヤブ漕ぎも全く無く快適な急登だ。尾根上から山頂までは少しだけ距離があって平坦なのでガスに巻かれると方角を見失いやすいが、山頂は樹林に囲まれて展望もなく想像していた通りひっそりとしていて、沢旅のフィナーレにはこういう山頂がまたラシい。



上部は苔生したもののけの森に奥秩父の雰囲気を感じる

下りは二瀬尾根を下降する、市ノ沢を下降するという選択肢もあったが、歩いてみたら二瀬尾根でも十分お腹いっぱいになった。。二瀬尾根は破線ルートになっているが、しっかり踏まれており特に迷う事もなければ難しい部分もない。ただ最後の急坂の高度の下げ方が理不尽だったような。。

和名倉山山頂、道中誰とも会うことはなく静かな山歩きを楽しんだ（左）
最後に三峰林道を歩いている途中でみえた深く長い和名倉沢が強く印象に残る。
沢登りの場合、道中で遡ってきた渓が見えるとやりきった感のポイントが高く達成感が大きい（右）

合宿は毎回それぞれに感じる課題がある、渓の内容がそのまま充実感につながるとは限らないが、今回は単純にこのメンバーで楽しかった。（毎回一緒に行っているメンバーではあるが４人で行くのは実ははじめてだったから）

今回はホテル・ニュー和名倉（幕営地）で酒のグレードだけは上がったが！？今回各々で感じたテーマを持ち帰り今後の活動に活かしていきたい。

和名倉沢に源流イワナが少なくなってしまったように、沢登りの世界でも‘天然もの’はなかなか根付かない。我々が活動するフィールドはそんな野趣あふれる場所にある。そんな源流イワナのように探究心を追い求め、時には野性的に彷徨い創造性を持って今後も深く山と関わっていく事が我々の最大のテーマである。